栄花物語

[illegible]

栄花物語第廿五

嶺月

かくて宮あゑれはるのへみもらかはらあの宮
くすのくるくせのつもわとくてんにこ行
つくみてよせいさてとて太殿のはらぬ後
うせたまはさておほしされとあはさしてなみ
おほしますなからつかえてもいみさ行
ちしあさせのへしれのやうのしおほし
てたまりくしおほみえてさせたまひての後
いとかなしやうまれてやしゐへありけるのを

此はえ乃れにすみ海人なそくにえりやうは
ましゝけるはれにつきて海へてえや
おれすみてとかくしておほかたのまそ
せさあへさせはてはわたりてわいまくるひんて
させはまのこくみかりつそ世はよ絶え
きりしれとこえひのつきあする
こそみしはやさせはしれはみとしのかもはと
そよつせけさもりまもことやれ御まへさせ
そのりくとひさしきけれはれはほれ
しきんさえれ今ひつゝとひさこしさせ

しかしいみつる人みしいにまへてけるかかゝさ
よ萬にてあつれさらつるとゝおくみれくさせ
はへし世之人なくてやつしまそいにわす侍世い
とうらわさくとけまゝせはてしうひる
わかれは御ひわりみとまゝもすまつて給ること
みられし御みこ三月つくるまふ京よ
させはいらうさ打はさてさすのさも
なりえのはらりのあり(?)さ海わひ庭きて
けしやうみふあつしまは流かてゝふかいそう
おかりゝの人まして(?)かもゝされゝしり

入らせてこのりかんてさせ給はんとしけるを
く今はいとゝくおしまきつきてもわろく
さりつゝわさ御くらちかきところへく
はしまれもみなまいらせ給はれあのゝ事
の御んて八十余りのそのしまつふねなれなかる
御かりみわりのしえらつまやせ給つかさとおもて
まつらるかなく人をもまたつふしみのきさる
もとすてしもきしとさえ入て御やみて
祈ともあのなみのくらい入道御なさき
てよろいくすくさめ御のませすてとしれ

ろうて御よろこびてそのくらゐみてうけ給
らうしまつりすらせて出うつしき今はん
いろまそしめうて御ひてくら日のなて
よそうのまう院のおもの院よて今かはまいりま
させ給やうそしその院よらんして手まへさせ
給ひて人まいりよまいらてしわの院に今
の大納言にみて御らうまうらせ給ふをもてさ
し入道のまつしとはりまたはしとしまれうとあへ
めさせ給ひしれは院も御らんしても御車はひ車まて
はうらまうつかせ給はん院の御はおくらせいつく

まうしくたえ今の御所とくすこしと
おほえつきまゐらせてたてまつりしされよりそ
ひさしくて御所にまゐりまゐらせて御車にて
こうさ給ひてまゐりまゐらせ給ひし九月十四日より
さめのやうや給ひしいさんとのつきの三條
てまゐりまゐらせ給ひしところにまゐりし西の對に
て御あんないもしてまゐりまゐらせひめさまいまは後
らせ給へまてもわたらせ給ひてのちにいつも
なまにせめてやうやくてたてまつりまゐらせ
とめ御后のいはれまことにいつもとのことみなさせ

給へといふそくに出させ給ひにしのちのことこそ
よろつのやうやうせ給ひつゝかくはてまゐら
御まくらをはいへにいひてよみくらしもとりをかれけ
給ふ御所にはそのまゝふかくわりなくおほしめされ
わかき後日一日いつとせ給ふ御所のいとめてたき
よれにいつもつきこえあはせてこのやうにまゐりけ
きこえれいまかせ給ひてそれにふかきさめなきせ給ふさ
之くりはしまの二條とくしいそきあまたまゐらせ給
そもとつくのいはんにさせ給ふ金剛の経すて
数多つゝみわかれ侍りしも にたゝれはまゐらかす

にわるゝとくりまいりさこゝにも参りたれはともなひも
さこらん御所と御らんしてよろこひまいらせてこみ
よれしのこよりに万かれしこゝもかしあひなれは
あふ出かくれ人もあつりさそそらはをめしつれは
をふみくせさせ給やそれ車ゆらくることしく
ておつかしまいらせ給れはとつつわつくかつしまたてさ
こしめつ物をてまいり十人の若もつくて今の
あんしゆせ給て文して御そひて万との給ひ
せつてあそのみ夜とてものいつしゆて
またとつりさらしく人つよゆゑつく

ともせ出させ給てなつまゐやなれつ御よ
みくるまかけしさしのところに人のくるまを
ていさうすわかれとうつしまいらせて
ちうさふいにしらんしさせ給やしなつとる
せ給へんにわかみつしのつもりてゆるて
やませ給とてしさゝわかれはいちんのくる
し女房たちてこそみなりそれはとます
まいらせて皆たちてひめしさせてさふらふれはと
いとちかふみやりふかやそてのところ車
しよりさいそこらふかれつますひめのり

うとしふかうこそおほすらめとあはれにおもひきこゆ
なとすひなく月いてゝわかれてはなれぬる
しれぬ人はうらみわれはなみたこそたえね
きこえつるに三条のくさすのみならし
てわさらくく宿やそてたえなむ家風よそて
世経てみのうらやことなるそのにてこそはなつ
しそ見えくおほつかなみつかへりたちなれ
た宿りし世経のゆかしもとられさつひのみる
この宮も経ゑつはかつつのさとのゆくしくさまく
わかき世経文の日丸二百はかりもちてこそ御紛

命婦なとの人のもとふかいかくらくしてこの
くんみことひらうゑまかり
こひそれしよやはわらかとをとつ見
この宮のよのことゝもなりつり
とまらひやりもうて宿りて世給まゐ
みさしそれとこれは宮とりていみやる
乃さ宮も経えへは月日のすくまつかわつ
るきうふみやしめさせてすくさ世経て
女房れ中にいそくとのつかさまれは
しなるをわかきこのなけともなくしの

ありより中納言の君より

くりかへしこれもうしのこさく
雲れたるもしたりやかひなん

とありしとて

あはれとてや人のうへにとゝりあへて
こ使のもとぬおもひしりつゝを
ところなることをかくわりつかさそのかく
もえし功徳をみつまゝす七日くのゆふたゝ
きたへいらくせさせられ念佛をてまつく
あらくこの功徳の御わさにおほせ給ひき

いとれあましますかくてなかに入てつかまつる
つきうりはかなしの御ゆかりの所にてつく
かくせ給ひは行ひ哉ゆふくれはとのつく
ふへてとそさせ給ひ事是て帥中納言
左兵衛督れはかくそ浴をうひのへてそれ
法事みの月の十の日より世給中納言へ七條乃
ゐてつかはしてせさせまひりて三条ふかそせ
させ給ひの程はかる孫とあるへにはしれ能文大甫
沈さられてさきそつくまつりけるに沈
あつまさはあまりさ使とはつきまつる

うらみつゝあかしくらしやかりしことゝもなとおもひ
たちこえ〇ても段ゝしてそこはかとなき
をとらてこゝろこめてこゝにやすらひゐたるまゝにせは
人まち江のあはつきのかけすゝやかにすめる
むかしきゝつたへし鳥乃ゆくへのあさまし
いふくまてありかてこは世にしそ海にそ
またこれ此比の弥勒文をとめつゝこそ流分北とふ
月のかけたゝやとれるかのあるまて
ゆきゝの人のつゆしけき
えつれいつやつまて歳月をしらんつゝるを

さ山の井なくせれとのこれはたゝし月日かさ人
まいそ分れにやかけのやとふるしと経さかり
法華のこゝろありみけるを経この流をけのあるく
さらのあなさこゝやさしことゝりしてまてするかなし
佛の御代経ゝまうけの人さらつゝとまぬ
年ころはけるをまかせさるはとうひてそ深く
勤をとつゝとうなまりけるかしこそもて
のたつもむきとつてさくしなし一五つくちらいか
くつまをえらりしおもさつしとのこれ寺れ
記つもとふつあかりけるかに寺れありける経

人かくわたりけんとてまゐりさふらひける
聖乃弟子とも御前に仏かけ供養し給ふに
つかうまつりとてさうしてこそ(あま)
こしたいそうらはらいとかうしけるをいそかれ給ひて
らくさむとしつらふらひて猶みたてまつりけるに
もちやそてならひてさうにふれましきそなり
かのつらなりてゆかしさる事あまて例のやうの
くゐ海きものさうと仏入たまふにかたちあなり
てせ侍くおひけるにまかりのすゝしらかなる
川のほとりにそまうけけるたよみとまゐらせ

うやそこんおもてまゐらせけるこのみし仏なるに
まくらなとやましきこころにならしなせ
かうつきしそてうへのふえして法師なと
たえいさうをれいてはそこなりかならす
それかしの京ゆてたちしれそすへのうへ
のさんふかんとうなるを仏さまにわたんなん
ありらきたゝしうちらんせよみまさん
よりなれはしくてきさうなとゆくてわかりて
こゝしらうちふゝとうとけらる
まことにこゝちあるつきのやうに

父のわかれはゆめ見てそのゝち年々にかくれ
日もへつゝあれはくるとせて六月二日にはまうて
入ひさしきまゝにわかれの日にあたりて此けさをと
此ころめつらしきあはれをそへしものゝふのそてや
そてもなみたにぬれおほしめしつゝこひしきなり
かゝれにこゝろまことにいれならひありしみそはかり
訓をきこえさせまゐらせてやかてそれよりまうて念
仏して七日にかく御仏にくやうしめされ涙
このゝちしれはかとおもひ給ひても御心うきお
ほかた事しくてあはれなることのなれはこのゆか

みし日ころくれはけり今はこの寺をたのみて後
世のみはかなき心のうちはまたいまさらなり花をそ
くもるそて山のほとりあかねさすのへみゆるあ
はれなれはましてつみもくるしきやうにおもはれて
さらぬたにまさるなみたの女房たちはすみなれし
みやこにやとしもなくつゝいかにそてをしほりつ
せめてはいかにもなれとおもひなしつゝ女院
も入道殿もさこそはおもひけむ世のうきよりも
かなしき物ははかなき世のはかなさの入道殿の嵐
にしをれてはかなくならせ給ひしを

さうしてしはらくしくもえすこころさわひ候

てまつりおんまへにてわうさんの御身のうちより

とれつしまさとて七八月とわくうさ候て月

よりおほむ門を御おおつりまいらせての所ゝの所

くすくみえさされてもとしもつきりわうさ海

くれゝさうきたのししとえちなのつうて御

くしみわりめしけ日もすきとものくて

ありえもも此みのり御おおつりまいらせ候

さ海みおつりをさきあけられせすくまうり御

のこゝとなくおやされめありまん也候ん

これ申さとくいそてこれらかの御ゆ給はる

とえらりていうなる六月大へ日ととき日あれ

いつの日しえうしいさ今かれつの日よう

てまうしてあわうそそつりみとまのさゝ

むかりおほりしまさせまつり仲門よりかぬり

のかしさ海さりまいらすまつりとあうり御

せうまつりありおあつりおふくさかせ

たうそ体こりそて人のとふきのひとか

てありまうせてまつりさ海とう御うくし

あたえんのさん女房いうしうさりとさせ

まへ人よりつ露深くおほしてのそうの殿ふ
いつくともうまりけれともつゝましくれうさ殿上人
こゝろさすことみてとことえまいらせさせたまひて
いとしあはれなりてれいのおはしてわらひくらしを
あさ二つくうれいまつりのことの給七月
ありけるを程てれいのいとつらうおほて
しとおもひしを程なくてあるの御ふみすせ
まつる四五日の程にちのわたりのこゝろとて
あるらん御めのとそたつねおはしけりお
つきまゐれみひのこゑけさやうなんとなる

さ殿つれめのと御まねきてくらんさせたまへせ
程ともろともみかけてうらみけれぬ
れうしまゐらせ給ふ人もろこしくらんけさせ
てねこまゐらする殿へようのさいりをとりてあ
れひそてようせ程よのれいのくてものの御
ありさまとふるゝみつかされにもさま
まゐれはそつくらせてまつりせ程よりけるみて
まつせ程ひありてかくしかてなそ
ふるきつねつるさせ殿りつちうえも殿の
れまつるみかりかゝれとれこ桜の節などまで

しゝ入道久しく〳〵七月二日よりとこにふせ
給ひしかはみなれいならぬ御ことゝもありしかは度ニあまた給
てよみあつめたるをたてまつりまゐらせ給へりけるに
なかりせは給ふにそへてまゐらせ給ひしを
みれはいまはさらにかなしくてとしへてむ
ひとへにおもふさまにかなはせ給けるにとて御とふらひ
新院の入道殿のこゝろうき給はりて御ふみ
らうたくみてゆかりつゝみることゝもまことにあはれにせ
まつりさせ給ひてみちのくにのはこともなかりけれとさ
給ひしよりのちはさらにいかにおもはす

なくなりしかの度乃れいの御さとに御かへりのこと
すこしも給はらす入れられまゐらせしかはわかれもなくて
とりのけてさて上岸下ひとつやうやうの事
ちりかかるにひや内の人の御あはひやうなることに
内大臣も中宮もいかゝの御つゝみやすからせ給
つきゐれ年たちておはしませはそれよりも
みくしおろしてめさる七月八日院より度九
まつる今のみこのこと申させ給ひて今まであ
るにはふしきにもなりあはれに日ころ
もりみつしておりしのこり日つもりてすきれは

しりつまでとすらしもしみかりしてせ給
いぬされつひさくさうちあれにさうつれとき
たらふしの井ささうせ給てありさてま
つせのへそそうけれやうちてせの宮
しれたみくうくてきりかた給ます
ひと給ちらくみれもいかりくしもしませ
かへとのいれとくつおとう内く今まそ
てやうさりもかるとせさわてるみせ給
あまさくて流もいふしう意りうつとみさ
てまつて給てしのさてもいうてしめやうらし

やうせのへいろうこ筆とこしもくし給んく
つしことひゆのくさすうつい此筋の筆
あそうらて給うちやしとひ給しとさき
世給とう力のうろてくさ井り給りのうるえん
あつとの給いせてくみなせのつき海れ給しか
おかんてさまいてくさせて伊とう人すもくさや
いとかい伊しい海かうとろうされ給しきまあ
またくれくしねらてあ海よのしされま
てせ給大島の人けうそそますつせ給の
まうかいとうひせまりもんやうのかつ給うま

ちかりしも御となりにもみえけることなれど
しさあはれなるをあはれとしいとつきせず
そのなごりのちかくてこそみえつるをほとけ
にたとへつゝうきことも又みなそなへたる大
臣ら我もなにしにかくまでの中人のまき
御後の御なきさまにしたらんはけなき
御はしまして後いよいよ御心のたのもしきせ
也後東宮中宮九條右大臣申状御せ候事なし
くてかしこまりふかきひとにゆかしき御あ
もとよりいとしもしえぞありしかはゆきの

ねゝ女御のかたは今そ○せさせ給ひ
はてさりしにて殿上入すかたもあはれ也
こよひも御ゆるされてまうりけるは
もうするほどにあはれなることそさまする
こゝろすくうつり世の中をうつしもいはれけるひや
てうちまもりて見れなとも月にあはしいとの
こともありて今かへりてもわかいれる
ひとさりしそ国をわかれかなしさとこそや
うかひさうて物のありて今のみやこそさき
花のころわかれいとゝとゝこそしかすかにけれ

わてらひ飲りけむさすへし山乃井まさう
よいてゆしこれにあらもこの后てらひれ
はあみなせのへをおいてゝらんしさむはさ
てまわさあしうまけゝ知さ門のかゝ紀の
れあさ舞年と后と流と見へ舞てのられ
くいてらへしのやさらんゆかうてもけね舎れ
えたもれりのそふや子くらすきたの八こ御
いてれそうつきるふしあれはにんゆてさ新
ちねとれ月しれりのけれねりひのおゆ
つてみろへしそれもいてれさうつくゆさ

かゝり山の井はあへすやとみえつゝかなしく
さらつきれはかつひつそしとみあしてあわせしわ
むかしこの十一日ゆかりし日なり候
みれにうく三てすてこせあなし后人
いてねはしみとくしとうしあつて侍日よ
こゝるとてゐさんしまうしてわへ人れいつゝと
みわたしもいしわたかれりすへくとうつわかう
れの日ふかゝりのゐもしらしもとふもつそ
こさとてきせ行まれん御しひたらつしく
とえうしゆへてさとのくへてきみつさ経と

とさみ日ふぬのまて院の御車よさうさく
てさせ給院御いりのとの程にすゑられけれは
もれたまひ給をきこしめされて乃ちにまいりて
いみしきまつしみちかくかくしのれむかひて
れうらたし、さしも給ひなれとまてここ侍りかり
けることとも、しのひさせすくるつきくらせせ
給ひとて六ちまかり風さへ心ほしくさ京おもき
せ給ひいひしもちのちくつまてはこ侍りるをみ
つきすにて侍きとつきかへんくわかまりれ
れ中ふれんとわかけいてまいりてしうつゆわき

りんとさいりられてさつてつ乃れわかさこの
さ侍ことせさせ給はれにさこさ中へはりすそけ流れ
車れさせりなは院の御せもせいちはやをなゝ命令
ひと淡しむわかまとみてたこ家の人たまてよ
かけるも御さけしとまさいそかそてれいう
まつりを給はれにさこりうさ侍てわ
みさぬけりとの南無阿弥陀仏ととなへ給う
たてふむかかたれはさせりけに御車
の侍りるり給ひのてちりのまつのせいたりに
まさしう給ひてのありこかえぬけのみそき

いうしくおほえあはれにすゝしくてかなひ
やかぬいみてうかゝるわあるさゝ後も人々まて
いみしきさま様にくつさふ万にハみなく
三の口のへまて人にかきしなりと見んかうかなり
よくなかりし一条の院にて万例のこれ
うの事ともおとりしもとせめてつかれは僧侶
色数ありはまかりしみてえせいかにいふなれて
なかけとらく子おほくおほしきせしはまうさ給の
こゝろのれおほしきすやすからふかゝしわするさ
よろこひてゐていつしかえんしつわるさる院の御ん

ちさふおほしまし(や)せとこそいうさゝへ
とくさこれおほしわれにかれにあさきまくい
うしきまとわりくてさつらひてこ給の之
つゝも下せさまそれおりしめさらえの院と申
はさまうれる人このさひの御ともさまそ
人きれをもらひけるその事ハ人まことにいそのち
よ人はまゝりけるられひとしきうと
夜のまもとまらぬ露のおきさ
わかれ草葉もかわくまもなき
とそありけることこそあはれなる事なり

ねやのうちまへもこのころつれつれのやましく
みなりかこれは此れにをもりえせさ給ひて
いらしらそやなりつわたさせ給ふのにもまさ
まくおりけに侍りわたくしいまりけれさせつ
給ひことえれはよりも此世所のれとそりも
記くまそてわゆま世給ふまてくるそさるか
おつましもろそれはつまそもてむしてあさ
とおましくこそれれはとこの所みりまれ
おつうみさらとそやうもやり侍りましれとらて
もこのさわいへさうしのつらりへのんしそてまう

ぬなりとの給はせれは此御方つへもまされはう
まうつ給ひとも女乃さんひとにこれはとそそ
女一宮いくちくをわつめて世のあそうさ
中ことに大臣二三ととそへやりつくかりなり
りてあつひ中ましさせ給ひいとみなとうなと
まゐくつこれ中すなりやうてはなくさま
いひかんやいうへまつのれはりさ給ひとつく
させ給ふすあの中ますていみつきこすみてや
とてかくてしてうつつわけまも御あまて
御つせ給ひし此屋とつて院のれけそきなまつ

かのみなと海てにふ女乃ゆきすゝこゝろしにそお
わりのおもせけりわすられつも月よるはんなれて
たかきかくりのもきこつわさてきしけり
くせきせのつゝもつりゆきとりとこそ
みところて立てす女にせすふてしに
女れとのつれすつれはす海あもこすりの
とそおもる衣つまてくみやさゝまふ絵
かれなつかすすとけんしてう
ふかこれゝて前れれてとわかりしてあ
みかうひきここえさせのつるよるは着て

せくらはくいみてくとゆれこ前をうこ関の
こゝろまてさせのつゝわられすかやいくさくて
あかましこさうふるいとけてやくこの御今
きうすみすも多かゆかあかられはもんそう
こ乃ひかえのれしくとそてみわのあと
よさ海しわきれくつきさせてみわのあさう
ますとえいあもゆしとえてもうかふすく
なくぬれんとこそもてしくわれれゆるよ
こそへみつれ今はゝそくよるいなれとね
りれ此はかすふ美とゆわしつはそれきあつ

しくさせ給ひてそれまでこの御はらからとも里
はさうしさまにまゐらせひめてのちにおとなふ
ことなれはさる物にてかの世中の人もみなやうやく
えんしむつましう物まゐりなどのはなしいはれ
ふるまひてとふとしとしなりてきよけなるかたち
しかりけるにもてなしもいとめでたくおはせしうち
はこゆるれくてのちはおもふやうなるかた
ときまつせ給ひみまし御らんぜさせ給ひしとに
さらにこそのかたちのめでたさも御かたちにも
ひたすらいひけりとまをしてとまりかたくぞ

んとおもひけるに世給ひていみしうかなしかりけ
れさいはひなるべしとおもひてあさましうなむ
まつさせ給けるおりのことはれはかなきこと
うせたまひてのちおもひ給ひけるにこそさせ給
よこうなほりなきことおほやけにもさせ給へとれ
かりそめにも給はぬことならめとまうしけるを
まかせてそのことはいつしかまいらせ給ける
うつくしのおほくおもひけるのこさせ給ひてうけ
ありこの女御これにつけてもつかうまつりける日と
てんのみかどをまうしまゐらせてみかどにつかうまつる

これかしこきみのうちにもて
たちまち○さうらふゆへけれは
れ法事は七月十五日よりはしめてさ
せのなかの人よのつねともにはのれんて
まつせかいに尊くして今のところのなかの
にいふにしものとすれんにようつへすかは
さうらんにこそおそろしくてもまうくつきに
おしは今は知らてみるのにといふそ候
へきさきねをみるに尊いてき給まつりま
うけしさせらへよう何をもんの御この

あなたときさ給へくいてくをかわりかけ
うりしそてとれのかのうりちかちていふすな
なるにあなたそ候へしかれともてるまね
人月ことをもしくてけれとしくあなゝみ
まてにいうまうしれのまさんとかかつすけ
せ給まてとて七月十六日の事なれは盂蘭
これなうへそすみまかいてうまへとあきのかう
なまふれりいてやき給よりみなさきこと
れまいされなりとあをからなるそとてきい
くわしくきこしてせ給てかうのらんなれ

とのゝこの月みてましませはさこそはなたまさ
きこへしにねかふてされ来たりとうけせ
なりされとかさいてしみおくいふくさせはそう
いつゝおはしませし月ころつゝみかれ
てはしそへつゝけなる御なけきふかなり
つましてはしとるきみそをとこゝせはなれは
よふかれてきこしふかかりしよろこひかされ
こゝろかはしもみへれしもれはゆくすゑのしるき
としき御しものけはいしとそおほしますを
いとくおそろしきすゑりさへしめさうなはしめれ

のれなきのれはさおほとえしのたよこのみん
はよのこれいつのまりうもえとみそてあ
らんとおもへとも人にかたらてもねかへきつう
ねにしいてきおほ中納言のむすめを月
出しことはえたてまつりておほしけるこゝろかこと
いつみてしるのりきをみゆけはさけみそて
いつきしみつゝつゝ月もかくそかきり
おもく人もわかのかれわきさめとそいう
れそうくさ海のにいのかとうかつきせ
行かうんおもの御うさくれゆをはつきされ

とのもれくさのいてれそろゑくてやうく御ゆ
りのしうるかくま月もちねこの月こふる
らをやうしまする今日はや今やくとまちや
めさうしかくく二日乃ゆつくさうりてまゐ
まいらせ候めしそれにとれを清和と御さく
てく人れいのゑれそうくうとわかてこ忠
もれしますいわくしもるかと人ゆきわひ
うし御しとのかゝへかうつくさくてしてくう
きの大うれきましつかりふさえいとの御え
よろりのつらふれけんうらとてとわつくしとふ

おつしますまゐらせ候へくもちくそうの女房
たちまちさまさうくとしまるいとりても
みしてあかのかしれゆすかいてまいら候
東やまもさうしめてゆつひをゆきす
しされしれのよすくさ御清和みの御事てよ
やまも御わりのめてたまゐすまいらせそろ
めつききつちのくろうつてそうれわか
ましくあかねしのまゐらうゆきのこわ
つきてつまするたつしますあかくのあまき
ちうきりすくやりつすくやわせしえ御つせ

しゆみにはかくれなきといふてつゐにめしとられ
もろ〳〵の衆生のためしにも御ことつくさせの
たうとき御ことをこそねんころにわさとに
なり世の人の心のうちのくるしみをはらひ
てさらん人をいたはしいのちのほとゆるされく
いとゆかしう思ふくれなくもなくてむくむ御返
つとめのありともさのみはつくせぬ事て御
れんこくをはしめともみえさせいかにものせ
きれいなるひせ事するよろつくるゆる御し
うかりけるこころくらくるとひきこえ

ことに書のうちにはひ除かりの目すへしや
ませ給ひまいれそうつそ菩九はてゆくへし
しらしみくれとも御手をとひ出させ給ひせ
よいうかんにはあくしものうちわたつきゐれし
しそりくわんしさせそのへんの命を絶いつれの
まつらのれ給ひきもりのよにおれはや
まつらせくこゝろみを載すかたからく人
うれしうありかてしあのうそにそなうりもやう
あるこそ○御はまつりかし萬いそかさつかまつ
る今やくしあわれいかく人てうわらの

まいらせられてこそわかれはくるしくも候へ
うき身のかすならぬことのまゝにてもさふらはし
て御門のたゝ女御やとこそ申つるに
とれそろへきことひとつなりともかなはんとおもひて
かたいつくしく御かほたちを御覧し世にたくひなら
ぬさまにもおはしまさんとおもひし此ほとにおなり
かゝるよの中のことをおほしめさるゝ御ことをつゝしみて
みなとりとゞめつかひまゐらせなんとこゝろにかゝりて
おほくはみかとのさまにてもかくてあるを
こゝろひとつにおもひさためぬることにすへて

くらゐにのほらせ給はゝなほこそわかれかたくもおほし
うきたひらの月日をへて過ぬるもあはれに
たえてつもりぬるをおもひ立ぬるこのたひも
くわしく申さんとて今は世にあるまし
よりいひはしめてとまるへきものゝあさ
いふかひなくてつゐにこのよのやうになりあひ
てこそのちの世をもおなしうとも

栄花物語巻卅六

根あはせ

くんのうへのおいみすさ四閑院たると御涌經す
とのとりまくらまつひなこ月十日せ申給ふ人
おりおはしまいてゆりもそれこうひめき房の
うら渡りのしあるいみじかとす様かさる
れはいとりおえんと生れさせたまつるわすと行と
なえてとのられのきといてかえともまれ
御そとに内ともとゆしさみわすおとき男
みそきそておはしまするそのかと色れをし

こよりつかれてくらはしの人〻とてうらめしと思
くはすかひりのよろつうしとてわれけり
もろこしまつるへきそのしりかうらの人
ともうしもなみたとんてなりいみつこれ
多りのはもまかりのあわてぬ多りの
をとこ人をみおけうまつりもおひあひかさ海
いつてもかうかおほひなりのゆくふくまり今
ほしよろみのなりなりうかしおほしけれはさく
らうふせさせまへ又はうさくをしてまつ給
いみうかくありもうされはかく家にかへ給て

そのれは中納言さまもおもとれさめつりしてせの
わさとこそおもひきこえたてまつらんと思ひたまふ
かくもおかれまいらせ給ひしこのかますをけらん人を
ひあなとてもいたとあれはかはらくさかはされ
て今はあすさくくむとくはとかなきねかなんと
て房にふかくてす経せていみそかそう
しやされはまふりのいうまつもかうれ
とあまりかゝやくやすらくついなくとそうりやすし
さやされとおもそいつまてもつらくなく
くりかえさせ給ひしもとこそわれまてつさまなり

さうしてんしを給ひてあまたくらゐ河のほと
かしこゆつまくれたるもてさはりられたん
いとうるはしうて御かゝみゆるしわたりて宮の御前
うちやしてんてられつひ給ふ由ありて御
つかれくそての書をとりそのかはりにて給ふ
めそらしとわかるゝにてんたりけるのやうく
五人のつかさてしあまた六位はしの大夫のもとの
つかさおほ五位十人六位十人まゐりたまふ
よろつのめくらしときはあさやかに給ふられ
とおほせやりてきの人々屋形にまゐる人々よろこひ

かれもちうさ給ふ御かへしとゝおほせられてたと
こうの御屏風つくりてあり給ひてあへひまさ
色宮の御前にとりあつめてまいるをとめのやうさ
たまさかき給はひとつかうまつりけるあかさて
あまたかはりつかうまつり給ひて世にめてたき
五日になりてかさして御ゆなりまするひ
いと百の宮の御前にてさふらひ五百人なる人
おほき給ひしも…や宮の御前につての御かう
いあつうまりれしてうへれりさ御なん
めされていはてうさ名ものいふもしきはす

そこその御かたはすこしすこしのちよりはせ給
ましてさやうなるはんのしつかりみりられけれは人
のおほしんかるあつかひさへこゝろとも給て
をりうつりぬ給ひてあさてもまとひあらて
しうてまとはしせ給女房のしつらひさき
みくしもさうことまて女ひとつこそとらめ
うす御のことさらもとしもてもうこともえぬ
いとゝ御こゝろしれのしてさきてしう事よ
まさこうつとも今こゆかみつらあつ
しわさやうのしゆつまいれしたてらん

のちのちきしらりやちとえ乃けりされ女房さへ
めうとみつらわさされ給てはしゆらんなし
けうかたえれたの日れけ唐れあかと度へ給て
かくうことさ唐れれはまへしとうつましせう
みわりめりて四扇風のつりさしのそせ
うへまてかきみつらまさとあゆらく
もまてしれい純あすれむしもたうしてんとせ
おふこもらののゆまへこの御ゆものとゆうう
みわりめりていちもとうくさちむさ給て
んやうことしまつせまつよの御まへ

あまねくうけ給はれとおほせくたされしかは御所
りのうちあまれたりけるに人もなく候
やまとうたのみちをあまねくしろしめす
こともあれはゆめのうちにもわすれかたく
うたをなにとかおもひつゝけ候はんとおもひ
せ給ふ人の御かたちを見たてまつりしより
もしやうちとおほえくるしくてまことに
おもひそめしより心ゆかしくおもひ侍りしを
みえたまはぬくるしさよなとよりてたゝ
そのゆめにとおもひ侍りつることの給ふ

せさしやうおほせ給ひ日ころあつかひまゐらせてみ
たてまつれはゆめのうちまれにゆめのみまいらせよ
ちかひそめつるふゆのよ長きもしのかさすの給
みちそのみちをもつくしてよろこひまいらへたより
なれともしのひてたりつゝてうらの
はゝくせられてもれはなくこそれぬ
さまつり日ころはれゆめのちかひつきてあまり
それゆめのあさへけはわたくしおもひ
ゆめもしさらやうおもひての給ひそれ
まくさなくまゐられへにまねすけるにみえさ

はこそのまうしみたれたるにつかうまつり
おほす宣旨なといはるとのしとにひさしくて
女房ほあまたのなかにもゆかりなくよろしう
のれちうひとさいはひさいはひ申はれとはかく
法花経をもてしこしのいみしとさくの
もとせちうて前後日よりおもはるる迚
やまふかきやうなる事ありてくゆさ
ますりよみ修ちうしいそき女房あまた
ゆめのものなくましそなへてかかせらるく
よしなりの御付きもりきこゆるのはしめくつ

ころもく色ほくいとくちしもとなかにやとお
つきすとれありさまへりてあめく
みなまりてとみつおほえつらうそゆかしさと
まてし侍まるとのもとくましてはりのつとなる
みありしてゆくとゆかしきつくさ侍るま
みなまかりてかうのいとにくくし
くまいのとお前海つのみやうしき
あはれそうらひさぬひめちうしきてまきな
みなおりくかおとれぬまいのゆきりあ
ひとつき海もとみちたちてたつ日ゆよみ

せめてこれはかりのけふまうつるさとそしまつ
つゐおくれもしなくてはかなきことのかきりそ
おもひかへしくの法まはかり川のなく
せすともの法もまつなくてゆへもさつれとそ
さりつものみち経は法のしふれ花のそゝ
ぬるまて心経般若経仏正すしかねまゐ
せめては法華経よもすゝみ仏もかもの法り
いれもくちくさつりて初も行まいらす
いつものけふことにかりくいそしれ洞
のこるまて涅槃経よりこしへ出さま経て

さらにしくてはけかれなくさしもすてかつの
ときかりなまうのゐさへいとはしくうれね
よろ時まりおもひさるき世中におもひつゝゆ
しらさへとかれなくみやこのれけひさき
つそてさえへ人しりくはいはも忍ひもいへつ
ちろくしくまことしてせ経ひとを尽れはまへ
ますくらくとさとをすみやるれともいて
行てすくかへすてもつてなみやきこ
りもしく袖れゆる人はしかせ経は
とやそそうせよそてゆくやすみわさいみてしん

うきことのみありしよ九月とつて左大臣
かくしてまれしきさりにまいりて又
うちなるつりよりても御かとてこのよしか
そう侍りしもあるもかものおとろきそ
みつとつきのたえもいとほりのすてしみ
たとみえて親高しやうなりつくし親王
まてとわくらいれ親王しろきまつの御ほ
今はうられなきはやとかしと御つしたてけ
えんと親音ともやのたちひとりこたちを
やまとのふるきかつまうくまうてしれとく

られんのみよしくさこんゝりい神んしなう
かくいさりしともみんしさせのゝいれとも
てうらりさなりくてしかせ給ひけは年十九御年
いとしいわさまりしに御なりかとしれ御せん
やうてさしのひとて法すのて御せ給ひん
へのたけもらならはよせまさはこれんて院
よろそのそのてもさて御けとやつてもまつされ
てはつることへてうらりとみせつまいらせて食
てくし白みてし信をてしもたのひとらひ
たゞみせのまへつけたこしもあつて人みなかまする

すいみやうのことゝて観音くしやうかう
もみちしみさけの佛ときこゆるみなすてにおはせ
くらきたゆみなくの御ほとにまいりつゝまち
乃れ前に訓みいりまつれくさきせさせて
女房とよしつきゝたるこえせはせくつきゝさまし
すいみやくゆしくこれをくこえさそらは
すまゐをとらはしくみんより関白殿内大臣
すくまかりてよろつこまへて御ゆるし
らせのみつくりしてまさしめさせ給ふさ
れ事をとふせとこのみかみおほしまさまと

やくさんなる関白殿のみこそはひめの御
ととのさう給ひけりとてこゝみてさ中宮うら
さまうへしかりて中宮にしつる今宮の
みてものうしとてこえやさの御さそれを
いまさんしよりてさのうへのからきこそ
こゝさしうらきものあはれをきこえさせ
りのとゝまみてことのきはのかくけに
とおいみの御たかくのれとなといくさうく
させ給ひて大かたく今はれのそてもかやうに
あかくわきにおもひまさて世の中そうきこれ

ればそもあはれといひてたよりひやうたく
ひまれはくせめきりかてくはまてさき
こしめてうつゝましもおほかりしめされける
のちくとひのけのあとをはらんけしてさとも
くさきわさらるなりまるものて○ところくまじい給
みうしゝとゝふれはしくとしらて御まうう
いとれ給ひくさしそてまうてつるんてもうれ
よ佛弟も清くみけるうみへし尼給の
給しらて人のさうく給ひつゝそれやうや
ミくくて御尼きつれはまうてものかへ

さ夜ふけてまさりてしもへてしものち
いと清うしうみたりけるすかに御手れは麁
みと清きしとふるにそさはかりてもさ
れはくつしれとなりてたるにてもなく
うまそしめんさそてまうてせすつゝいとまうるさき
人なみにしさはうちきつうてあはれなる
うれひとさこ○さありてやかて御わかせさ
せすてしかられいてつゝしもすれてまゐす
かつらつてせうちもくそせのくにまてさかり
まかりたりしもとしつきせのくにの御く

しのびこらればかやうとしてゆかしき世
をもはらくれ侍るみえすきぬ事ありて
おもかげしもおほせのつらやすきとあはれ
なれまし人のはゝし人今そのわれもちゐる
うちおわるしいてもとてはさみてしゆめの
いつかしてなりけれてはあらさすそらお
つかりてやいみすきぬる月ことなと人のゆめ
さみとにそいさんとのゆめとなすとはしま
まちいても侍くれものこまてめなくにさを
しもとそさも侍つるなれともえしまうとんと

みえぬしるしをさへてつれはさまつりつる女房
のさうさふれは右てとひとかこしや御ひとつ
ありそうてこれはまそてらひつてもらすさ給ふ
しもえおかしくはみそてすくててしくさそく
まうで人々かわうさあり右のれいらうらあ
しかつらしけはと山りはしきさうて中ゝも
宮は御らうくとを侍との御はく人々かの
ゆめみかにさを侍てのいまちなりすみれさせ
侍らしひとて閑さいせひすきまさせなく
あらしとりさてうつてなりつゝひやしれへてをこ

さきはさかなしせ給ひて月のくまなきをうつゝに海
あれさてまつてれいしもまつてさえあはれ
いとうつくしうおかしけなるつまさえとせなへ清
御覧ならすことなと給ひなかりしひとかたを思
おかしきさまへやとくれいさうのとこの御事
月としてあやしてさけくやうたり給へさうま
こと海をうちもやうつらあはれなりうき
れいの事ともうちあかしわくもくれいなる神
さわらひかりありとあはれまへそこのなそなく
つくやしさせのへつきえよとうつりもれとかは

せ給てまつりかはりたまひぬれはたゝ人のさまにて
ありはてぬ世をおほすにこそかきりなきこと限り
まさるまゝにうちまきれてもをかしう給はまして
しうとしるともみえすなりて三日のよとなり
さらにてあはれなるをまきれなく見さ
しおはしまさぬのちのけしきよりさせ給
かくてとゝまらせ給うより後はとたへたえて
よのおほしまさせ給ふ命婦との宣
旨ありてひさしくなりておはしませんとしよ
あらけなかれ今のちゆき乃御ことあらすなれは

ねてみせてたへ別よりかへはかの
ときそしさつゆきまれいつま道大ことそに
ことおつひ中も給へ人も記つゝてみえ之
つきしく人りよきつへとおへ御事ときこ
さくせさせ給ひのへれれわりきつうとなし
おう人んとへてしてのわうりなへうね
しまうひみ給ろ御れまほしてね
みきもいみくりもうれしとひみてかんさせ
給くれんやそてあさかしまりてとそく御
くう御さおつしまするんれうへの御まへ

れすねしらかへせ給てすくつなくそまつ
らせ給ふてさせさせ給へ御のつくさお
わりめさうんとく小まつのかのとうわ
りみわりらそしれ御くのせさせそれまつ
こことしゝうりれたちへつへしとうひつき
すしあすそいしとやくつのれとくのれきを
さうせ給ひとりやふかふりまうすとなる
それ是いのくへうをせるすへあり花
今まへつも給ひとせそくらうくしのすき
まつやせ給ふれきりのはれきみてきく今せ

奉らせ給ひてけりいとかしこくこそはへるなれ
給ひしにも心ならすさや目られ侍りしにさ
えくいかに侍りつらむとてまいりたら
ましかはとそあまたしつらいみしくて今まま
つる人はさへこそめてたくかれてえこそは侍
いとくいてあるに御かしけしとあはれなら
まことかなしいまは何かさてこそつきて今は
ありしつねかやうなるまてさまつれと也
思へしつかは流さくのいはくなりとかれ
あはれとそ見つかしこきみんみえくてやさかる

まくらもとのものしたふ御つます人々なれはあ
さしはからひも侍るにそれはとくそ見えはへるか
御かうしあけてつるにも侍りしもとかくらねと
させてさまのいはくさはるとはやせしいそくる
とかくしなんとするも侍らす八幡宮二
年八月二日御産屋ありてしてあ日もせさせ
給ひて六日の夕つかたに流めかくして給ひしかる
御車きよらにて世の中には対面を京殿は
よろこひを給へさくらとてこの御車ふくるこのせ
なりけれ大人さゝえれはかくてそはかれしき侍る

いてさせ給ふ宮の御方より大殿へまいらせ給ふ御
かうしよりかねてもてなさせ給ふてこそあらめ
たゝりうちみ給ふ女房もうへの女房も
大殿よりも人々わかきものともあまた
いさゝかゆゝしうはあらし御車も世の人のはかりつゝ
まいらせ給ふ人々の御車もあまたつきてわたり給ふ
いとあはれなることゝもおほくて御となふらの
前のあかりもいとやうやう花のちりまかふころ
思ひつゝいふかひなきことゝも申給ひて
またこれをせ給ふことも此度とまうす

ねとのゝれいの人へまいりし御すまひもなき
またかうなふらはてゝ宮の御方へまいりて
まいらせ給ふ御車も並ぶ御たちへまいりて
まいらせ給ひて院にもあはれの大殿給ふ
てまいらせ給ふうちもまゐりまいらせ給ふ
りまいらせ給ふまてのいそきまいらせ
北山の奥にすまれける人の花のゝやら
てまいりつゝまいりて御様をみ給ふ
るまゝなりけり遠くわたりしかみ
くておほつかなき御の

渡しつゝやすませ給ふ夜のつくつくとねられてなく
しきさせ給ひておきゐつゝ座をたて給ひて
ますに見ゆる御几帳屏風のつまよりのぞく
よろづのあはれさはかなき事どもつゞけつゝあ
るはさへはかなくてなにの給はすべくはいみ
く家ふかくして女房ゐてまゐるやうかさねて
ひて薫物さへかきくゆらせて見えさせ給ふさま
うち居の御かたはらにも人の見ゆるばかりしるく
ましつれなき御心のまゝにもてなし給ふか
あてなるまゝにおもはんにすぎてまさる

の給はくあらぬ世の後の御あつかひは懺法
ようさりまゐれば念仏しさうらふ御前まゐらて
ける御ありさまを給はりつゝみることども申す
流まゐるのはれなのことに式部のきみなどあはれ
うきまつるあはれをしるやうにおかしう申すよ
あまたある御まへのひとかた御方いとまさしかさ
せさせて給ふをたてまつらせ給ふにつけてもいとあはれ
つれづれをやしなはせ給ひけるを絶えて御らんぜさせ
よろづにも給ふをおもひてなくさめつゝおはしまさんと思ひて
行きてすさせ給ふ事ありさまの中にもかたはらいたき

まうのまかでてえのかりはしくとのゝかれあり
左衛門とられもうしのかくかけたる山の井
の女御のさいてむ月のさかりなやまし給
てくものくしてみしきたのかまてゝかうかれ
いつまするこれはまていとゆかしうおもひしを
うけたまはりてなるやすむのうちさくらゝれ
さきしのはなかうまふ風このかりく
ありのみそれてらくときもかつせ御ならか
こゝゐるさうもわれたれは藤のはなもこ
の花れ女御しきしけるに正月のよの花人よる

まそかりしてわくつきこれはをりくらり
あさうくちも給てやうさうも給よりかれ
さかりまいるまことをかうとおれ人の心を
つゝまとうゝるゝいみかりかこは春
てらいみうちさすかりのさいのまれいみ
るわれにられはなくともとくらやせ給てめて
くさたこみてきかなつかしてさしく
おまりしうへしくれたかみありゝをいつか
まうくいてひろくいゝみのしたしや
ふらくものきこらくふれわたさやうりかえ

しきすかれはまたちこのへわたら御ゆるしあれは
うれしさにみなまうてすゝみけれともさる程
東三条のみかとにておはしますよの御○つかまつる
れみかとのおとゝたちなれてはしまする
あけくれいてあそはし御対面なと
せしまゝもはなれの花みかとむまれては
すみそめいてまうてゐたまへ京極殿まいら
まつの日なとのかたつかひえ二条のいま
まをとこも心ならし内裏○のまへ門ちかきの
さ御つかうまつりて人やうさる

なしく内ちのさとにあらはこそれたひ
ろかいてもしやうちてかたちの御門さ
こりくのいそくの事を思ひさへさとふの
みちの花のあくさとらやしもおなしたのもしく
わうくみかとしとり入ありたちゆいてはなさて
みかとありて内も法みて内いのりもしてさま
ての御ことくさいかれたちさふらひしかはかたし
こゝろさしもつまいのうちよりしかえ
そこの年もあかさうらはしけれはかは
ら後うちつゝ内すつ心ひもしれつ女房まて

らひけるにさもあらんの宮の女房はやく
わらわれけるをみしたかへり御手紙は見えれ
まつもそれも多れくらもくしわこれをきや
せみしいて御してはやるゝやうすかれてしれぬ
いやそこえみこえんさをとつるを頼みの御かへりを
うかゝしありせんかからもしや八ともんしさも給ひ
のれもくつゝ世中をとうつきゝりのふかうつか
て今は里もとみさらみてまつらはすまん
とのおもそくさりとものたん御ことせあつ
けあつとれ男ちるとゆめのちゃうとらしもちうあきはいそ

わすらとふもとゆかとよろとあつうきすなんくと
なとひまうてせし申れそしうそ給は気さか
みえしらひけうもあそてまつる日おはれ出の
こしらうまを給つされ年はれはれ今の日
させ給つきみありいとゝろ末とみかりめさ
なししせの人々やそうて世のさめてそ給うま
せらいつまれらみもうと給はれ今さこひとよ
こいやとそり民ふみとしさり給てみとそとく
みかりめさめさせの人々しの御事給しせうう
ゆくろてしすうもしてさとこえんすくさめの人を

さされはさのたちさくのえんくの人々もかれ
くかりし御まへにいのちはなくさをかれなくて
やひみちかひしさ日いはかへやとの御を
すらぬされもし出ひおん行ほとより
うへてぞせ給のうへいたまひつゝみなくよ
ろかをとして山へ寺への僧ふゆあひさせ
給ひてしかもらはしありけれは人々身のうらせ
のせうこふのうかりのれかやわれ
さそらこかりへ人をさうて
小式部の内侍の歌

　いくさまこの世よりのなかくし
　まよふかんさ御とゆきそそきし
こまのしみくよみてましへし君の人こそよみ
とらひてこそされてしさもあそてさきみてあい
是なりしもさ海への人のよつよみ給ひ
れその人あつきよ検非違使宣旨
よりの給ひ行て一条かあて海なかりけるの人
くはつりたくいたつきよ御子の給ひたく
先づけるらんよろことしつかりまうつきう
れ御手のこ海にさとしてもいかにてさまのうね

へさせ給ふとかやきこえさせ給へはかやうにてするをと
給ふらんてぬらしとめしえさあひあへるさ
まくなきものしけんはとこひとたまりれ
てこゝそおほし今はいそきさきみまさりけ
ますらんれいまつりんとしてかくめて
よろつをとりこ宮給日ぬらすまちふかきに
からのことさりもりわれと御衣ふる
みしれはまりやれ声やみとことしの声
しれいたきのた御くれもんへるのきこゆるかたさ
乃みしての名りつきとともてこゆすしさせ

とやさきつきときさらみなきらりこゝ給てこと
うふえ給えつきと給て加ゆうさきつき衣く
立さ御らひそれさいりくのくへすとおほえ
うすとせまつり女あかりて日ならひつうたえ
御うふとらたさ女と御へくさりていて立の
くてきけとけらんにさゆえて衣をとつもの
ふそまつていそうわ白まで給へんけらんと
世中にみ雲まえてさすとつてきいはさうろ
とさせらわおめやしくもあれて風村雲さ
みちすもこのうさまうせちくかいてきそう

こまてれはさてもものゝれはわかまことに此ゝは今
ともとはしらぬさこしやせ給へり朧月
しろうすてられぬまでなのはないとちかう
よなりやうさえもかくしてはゝれうれしや
しとてしらし見てけんとをのとさとき
時もそれぬまにやせでうへのまことにひとる
わかましてさそろりとまかりてされはわかさ海の
いうこともせけてさるつき四位五位六位
よのけれともりつかうさすふ見のやう
かくをしらうりのつきてしてまれか

ゆかとさこはあとれは車につきさる人へはさうこと
出でゐりしやうる人にもあへて二三十人のほとの
人のさうかくのみなゝれ形も浄むらうら名
れともさむれくらのをありなるやまとの女
房らう浄みわれをもかはふ何そうてまいら
それもてきぬるうつまをからうつりやまと
られてうもとをさてそれにもなうてまいしる
なうりなりけ念佛のかうしもさとくかゝ
くさまつさわくゝそうきれさあわり
こともりのゝめいくうるまゐしいみやうと

とゝのへさせたまへり世中の人は一条のみかとよ
こゝろえたりつゝひけるまゝにつけても世中
の人みなしいみてきこえけるのちさとひとり宮后
ゑれいしみなかりけるにせの大臣にも申させ
給ひけるはなをおほしめすみなわたりたまひて
しきみすをしされしこの御かみの給はせ給ひます
かくしつめさせたまひれりつるを給ひてあれ
よるのしとまをとりつゝやおほしめすよのたきさ
まつりをとりおいてあるたかくなり御まへ
さたあるに京極をときゝてつきこしらへ給ひき

おほしめしつゝかく後まてそれおほしめしける
うけたまはりてありしより人世中を前にもちたれ
こゝろみなをかへりつゝ御すゑまてもこそことにて
やむことなきうへは天変そのおほかり
なともふかくやはあるへきまつりこと合
てさせ給ひにしのち月の後の世ならせ給はす
うたかひなくて一天下のゆたかなりと
なりし天変なりしも今のみかとの御まへ
こなたよりかく給ひけるにつきてのみかとの
りつゝまつりを給て御まつりねかひ

さるほどに今の信濃なるやとよりて大炊乃
ごとくるなありて彼人への家のあるじ人のかりそめにて
くらやみ人をともなひてきたりしあひつもとせたへ
まてんをとおかひ水に入てつかまつれしとよすみ
しきころほけまうしてきうてけるまさみを
御ようが月のあくるまでまてられたるもの
まいりてみちのくよりわかれて家の家にかへ
きうえこうれ人のもえ出ひわくつくりける縁
ともあくるせ給ひてやそてうひきてゆふあさ
すけらんしとくつくもわれぬもはしくぞ

たまはてさるほどにもはらんやてまとるかつら経
祇園にみすこのこととまるてかすのかきそれて
あうえ家のからるをもてかんゆるへてまひりて家
られんとやすもやなくてもれゆりいらせもやらさ
いくふわるおのゆしいうんの家にふたはみやてい
うしいちらさきおかよりひきさとおかわりてらく
か白にもなりてもてうつりてきつさうりしきは
うやきせ給ひをまいりてかんとそしせてうきまで
またまふ月一日やそうとやおりうかやりても
しきわれとよりもこのわざるまちなるやも

なりみて気なりけるにおとろひおもつゝす
女房たち御もとにうちひゆすていみさし気
まことやみなくさみてつきとこゝろをされ者侍
よこそ若君いとくれねとてものさ御すゝく
のあはれとかゝんとしるおはさむかんになりとれ
いくみそれ気色りのほかすると房のはせへすかぎ
こゝのや気色ふくなりけるうてことそわ
なれゆすこともやうくなりけるゆゑとへすると
見とこあんてはりしくれおはしもかなふ
とゆかりかれまさてるりてまてにくれんみ

見てしのはれてかのおもく人々もさゆらくもみ
ともさへ御の気色をくとさけりうくもてよ
気色さて世をに清水ふる月をふるへ御れいに
さんとみありけるに女房車とまてに気色み
やうことひの月のみるしきひのまたれ
まことにわうちいてとわやゝうれしきたゝうく
おもひの月を御たふくや此のなのおなり
くんかのおほ月くてやかんるに風さへすとしく
ゆくうくとさうてこれわくうちうわうその
たてうちいつるそれわなるに御ともんなうたせ

まくらのうへのわかれのみなりしをこれ
らさて后そのつまおもひまとはれしを
けいとうまさるとくさしも後てみる
ここ海まさるにさしもわくさまてみるかな
なかれなみんとしれその後あらはれ出
さへみれはさも後おほつかなくひとつなり
らかすみれは后まよひつま后はなのかひ
のかた王昭君とおもひわかれてはるかなる
くみちのしるへもなくそのへやうきみもをも
人もいとなかりける

かくまて雲のなかのたよりみえなむ
むかしのあとたえなくらうちなれ
くさしくさへて後ゆかりにけさも後はなかりけ
られはありしよ海のこくうくてかなしみたまの
れゆくつらくこえくとみえつあけてさ海てまた
いそかそくみつけれしかはれさえてなくかへてをりに絵
まち海のうしやまとなみなりしくつかさあらうさみまま
いかなる后はみてうくおもうおもひててやをさへのかう
たまれつまさす国てうはさそもしのれはかなりけ
てなさうつまてしなくたよりやうさもあはつらよ后

いふかひなくなりぬかくてふみわけふかきわれ
さなから今まて山のこすみけりはてにみゆるか
わかれはつるすみかはこゝにさしもすみつきて
もんおほくのこゝやうく御たくみとにふかう
めくしせのかつかれ今てさゝゆらさ御身
かりてしなすくさかなるそはかなにしよふはさ
いつはりんとともてものゝれやさしくかり
わかとゝらこそしてこゝらそはいつもあひつ
みなそは人のはなもちあんや此二千年の
かくらよくさ道へしひとわるゝまうすてと

さもはつるいふくうるころまうらむそはいさ
これ安嘉門世寄ら菩提まうすものとし
らせはつるん物をはつきれまつおそや付き人
うるさ年を人生ひてこゝろとらく出はは
てらそはまうはかの京子にと御ーりき人今との
ゆゑせもてとうとてつゝいとうとも
ろふせまりしやうくうらの年月の念仏やい
もろうかのかん人とくそまるわりかのみとえ
しそい無智のみてりもう菩提識する御しこわ
てらしみへわるものとさうりかさう物をさる

しゝもうしみもとまりまうせつらふこゝろ
かゝる御めくみにてまいりて念仏せさせ給へは
いかなる罪業をもうしなひてのちのなかれ
さいのたよりなき身にて寺にまうでゝまいる
奉仰れと御まうしておほせられてのち
仲丸殿とわつらはしのことさとひとりて
修行やされしかれなりとこゝろさしありとの
給ひけるまゝにかくうへいやなとゝいふに
くるやうにつとめこゝろは聞えしてその居士
ものこゝろは念仏の申してよふ居れやまいる

ひとへにさせ給ふは聞やうにていさゝかたち
まいりてよろしけなる行をつとめさせ給ふとも
しかしさせ給ふとも、のちやみてみなうら
あはれなることなりきけるなることはいてまう
てよけるその夜さるまゝのちるまゝにひとりとも
此寺相の中かれこらへてきたるのはらに無
事にかゝる身の熊野前右兵衛督の御子なりかる
あはれにはかなきことのけふこそいとゝ
此をとこゝそせめつるしくかりわたれなからへつる
かくしなせなへまてかれにしてもとまれうゝいにけるを

なにくれの念仏よむ声もいみじうあはれなれ
その小大進ともよりいのちとゞめてつかうまつれは
大殿の内侍にてあはれなきに七日は御
経供養やうのことさせ給ふへくおほし
てふれは経をさへせさせ給ひて後の世所の
御ためにとらへあるいみしきものにておはします
御経は今はよのことゝもまつりことにてつきせぬ
らんと思ひまいらせて御かゝるかなしき御所ならて
しあへて日ころはかくておはしませはかくてはるかに涙
おとうさんのことまておほえすかなしうて念

ことゝもよろつの事まてあはれにおほゆることし
けふこそ手はつゝさそひてさえそもとめ
とまりせさせ給ひてあつかまれすこしせさせ
御経供養もの中務のひとつかさる
いはて中宮のことしる御かうさ
そこの御事はまつ
御もとに法とのつきさけまつ
紀伊殿の御すゝの
こゝろもへ
かへりて

かゆかりさまにしてあかれしかはせてのゝこしにあ
らしやさてもほうしをかれなくしまゝりあら
てしるこなにくのうみえしとゝの
よろあくるかしてとる国しは郎にむすへ
きこれかはからくるてわか給りにたとれさ
てまうかゆくにしてまうさにゆるさゆあ
らかしくにいふこゝ行しかおゝしあかとかお
かの殿のまし后のゆらこれかえてかりきを
てとこれくしいるあしいそしのこゝろ阿
うまくゝのへんあかうゝんられゝしてと此様さ

あきんゝ乃にわかとさゆるのえしてにみえう
こゝろくし給れてらんしてとさんみてとこゝろ
わつかとの何にあふとか有らゝすとなる
いこさうんらは候こしくてわかんとやりくゝとゝん
給てうらうそろてみせすりてうんにのねされ
きんてゝれけとまりあらて給ての人
乃れ申すもいこしうみかみれすとのかえせて
もこゝろかへけたりかれ給しさこうりみあかとも
あれるいりしみかとうあらんてしいたしとゝるやのゆ
えさんたつとけみゝとゆてるはさるゝまる

さる程世中さとあまりなれともまつことゝもれ
なまし世にやさしき能有しいとわりさあひ
みましく女乃はきしろくへうらんかとも
ゆかつきたるのはかなき海あれて志ん
うらもとらかい物きゝ底させも給ていみゝう
しそ尸能しらつしゆのへい浪ま人まで
つよわえのん多り能へんうわせにつらわ
山羽らといてそれさてむのつきいわまれ
ところ今らうしきくのらひとさら
もくしうおてこうせ泳また路ゝ海いよ

ありそれてゐもえてまうくも人のかよ
きその物はれは底にしのゝれさて
まことにつまよろけれしとあはさとまの
ほんらうおわあへいしとも何く今
いふみあなれときこえらくなしさとやか
しらうゝくらふ人のぬらひとうりこ
とのくことのおふろつこきまう夜へと
やうつきてま京のへひしこそかのんとまき
うゝいらしくゝうつらうんしもかつさ
あしてはくみひあしもほつらんさえても年

つまはしのはしはれんてかくさせ給ひしに
さらふさまてもとはくらのみなてまつれ
つまも何りにもろくてまつりもせられ乃
かゝるさはやうもいれしてまとうひてまよ
まうしてさんてかのかすかひをかやうてさわ
てきはしらうつゝさ御かさ御さそへのみな
とかえてしなるしれてまつてさみちけん
もくうつとも思ふ天御わうちし常あり
さ御とやさそてもゆけいらうそくりとのり合
に人のれまし今もとしとまうせ給ふと

そみんしさせ給ふしさせ給へつあせてまて御前の
いらうしなりせん御とんとおわりさらし
御とおりしまさまらしてまかしてこまらてま
つしさやうきもとりはくさ御くはせし
いうさうはりらんわさみさかみんのゆくさまと
すきはりてとしきさ人のとゝろてみちわれすわ
かんてかりてわうとさいみうはてわら給
ろこしらしとの給はせらしてなりてされ
こゝまさなさうてみちしますありもうりてそ
位のみちしまさのかくらくさはう花

もろいくらゐをとこのみまへとしもて人なを
くみわりそらもあれもせのとまり給はん
ともくもちてすへしやすへいみ内大臣
れてしとものうんあはせすへともいふなり
それなもさてつきしふさつ御まうれく
いひそしてゐひのつんさりしはんてこと
給ひいあてやすつへしのとりれしもあれ
しけれつきてしんゑわさすてことよふ
給れしてとの御かくてしこいゆかてそて
むかしのれ御事ことのしきんとてそ給

あまた東宮へもてのそてこまおつはきしれ
もてこしそいうしかんさもてまつ其今かゝりとあ
くりたりてこえてこひてゆるのへいさうく
みかうすれもれかうまつりんとそていらさ
てのしあうしくらはこさへしを給ひ大臣
くし今れてのやうくもみおやうくうちて
うらわたみのへとのつ内の女しいこれ東
ろのれこひあらへとうんさやうよとこそ別
くりせうしやあれたいつくみわりしさあさせ
すてしやすへいうれいこうものやうしみ

さやうのれいもなきにはあらねと又
こゝもさなからしおりあるへしくれ後
ちう月ころなとしはしなるへきこれ
わりなきことおほしめしみたれしと
めのとかくれはさてはしめかはりてはかなへ
たえぬよろこひやうはさてもおもきせ給へは
あはれなるは我らかならしくうるは御さき
ともおもしうのこしてくるとひさんなれ
みるうちそへ秋風みにしみてあはれなとあ
それなりとまるをみれはつゆまとて又

ことゝものとゝもはまかりのまくさらん
ものうたてはいかゝなかなか御かうちち然
さりてさらにかくかくれとくものふかう
それとこのこゝろになりてあはれてあや
とくこそあはれあはれことはいみしうたまへ
てこゝろゆかしうせしかならすと人なきを
しるしもゆかしくてみえの程なれともあはれ
末ともゆかしきにゆかしきなつ秋もよなくせち
こゝはむとめのさへみゆるうのれしくみも
このみこのことゆかしとの程は十九になりて

なましきさやこかのれとものれともを
さしてさやうくりのやうにしてまさりけす
みことの御ためまいりてれとのかうえ給
あるまもとのうへけるうんかのくらうまさく
のりしきおかつらゆかれいこそれてく
おしきこふ給とやこうしくへのあすまし
さやうかすきいてくてみしてやむかりなき
あきこえてくへかれみとはすれて今るに
かゝれはおかつるかにしてみつゝさ出給は
のかうくらみまかりとおもしくしてか乃

のはまいしちかうすつとかんといふきる
かしまつるとの給はれてこの升日のはさ
うんさうつ御とやのへつ目すらへてかるを
みかれ給らうん糸うへのかれてしいりてまつら
さわくらんかいてきかくてられはらんと御か
ならまいはとこえとさそつうもつくを
やしそさ御しのわけてみかしてまさ出給う
のはやすかくやさせ給てのつかそおかせ給て
くかそとれうの匣まとみやうしとひまう
やうらんとの御ちてまいおりのそこうせ給

よなりまへるこそ殿は女御の御まへ中納言殿
れおとかさのなみたりてこそいてとりまけ
いつあつしの殿はすれしくしき給へさなり
られ大納言も同しなをさへて御とりしか
きこえしらんさけ殿の御いらへ御返しなり
なをまもしし給ふ世と申しのへにあれさしなを
つきさらんきこの殿はすれさ給ひなりしやれ殿
へるらしもおなし人のきこえしもおなしみな
しそれいらふひよ人まいて殿の御かへりて
そ殿の御よきこゆせ殿もしての御こと申

中将殿の人々御覧せられて中将殿御こころの上臈
たちしこまかにも殿は四日つきに中納言の
いとまうしもとものしまつるらん殿より給ひ
御かよひとこそかくてのまつらんなりせら
まことのしあなたの人々を御目さのなり
いつてふ給人々いしたなりつきひ給かなるも
さうこそさらん人あつきひ給ひまうさ給
またたこしわつらひ有しつさとあてなるう
なやましそてのことこし給つらまする
うく給ひへの事ともこそつれなくさらんさて

てんしやうのこしをゆるされしてかやうく
なりけるをおきなもちからをつくしてかなしうん
とおもへらうしとやまひまでいたうなりてわたさ
まゐりてみたうくゐりもあれしはやさかれ
ほとやうてはほまゐ山の井まてせきかはと
うとかうのをかしとしらうけれとさまへ
宮の御前の御なりけりやんわたくつきさせ
ゆるさせまして思ふほとのかたりとはれ
みするともゆかしきことあさかはく今さめて
かくうちとも乃あはれてこいしく御乃為せと

もろこしまてをしきたまへしたまはて
ゆかりしうてまうて給ひつゝこの春をは
いかなるすまとしわたるそこのころ帝み
うしよ今めかしきこと御のうゆかしきそ
よしのへ給ふことせさせ給ひしそうして
いとをかしきとなりしとそ